

まえがき

今春、『塩田博文の義歯力』（デンタルダイヤモンド社）という義歯の本を書かさせていただきました。そのなかの箸休めのコラム「臨床福袋」で、患者さん対応というか接遇の手法を少し紹介したのですが、これが私もオドロクほど好評でした。お読みくださった方から、「こういうものだけで読み物を書いて」というリクエストがかなりありました。

それでは術者である歯科医師の義歯作りの心構えを綴ってみようということになり、執筆いたしました。

しかしながら書き上がった内容は、義歯からかなり離れたものになってしまいました。でも、ここに書かれた人生論も、『暮しの手帖』（暮しの手帖社）に書かれているものと同様、読み方によっては、すべてのものは義歯に通ずといったところではないでしょうか。

本書はある意味人生訓の本とも、またある種の医療哲学の本ともいえるかもしれません。

私たちの医療は人を相手にしています。したがって、そこには人としてのあるべき生き方みたいなものが根底に流れていなければいけないし、そのことを決して忘れてはならないはずです。そうでなければ、病んでいる人は救えない。助けられるはずもない。

悟ったようなことを書いてしまい、恥ずかしいです。ごめんなさい。

執筆にあたって注意したことは、あまり量を多くせず、私の考えている義歯作りも理解していただけるよう、極力短い文章で仕上げようと思って書きました。ところが具体的に義歯について書かれているのはほんのわずかで、手にされた方は羊頭狗肉の感を強くされたのではないのでしょうか、申し訳ありません。しかし、読み方によっては義歯作りに通じるところも多く、こういう考え方ができたらうまくなるかも思っていただけなら幸いです。

写真もなく文章だけで飽きないようにというのはとっても難しいのですが、イラストレーターさんの力で面白くまとまったのではないかと思っております。それぞれの項目は、一頁に収まる文字量ですから、約一時間ちよつとで読破できるのではないのでしょうか。

蛇足になりますが、本を書くというのとはとても難しいところがあります。あまりわかったようなことばかりを書けばお叱りをまぬがれませんし、逆に自信のないようなことを書いても読者に失礼になってしまい、難しいところではあります。

しかし、私も今年還暦で六十歳ですので、自分の思いをあまり躊躇することなく書いてもよい年齢になったかと思えます。そんなこともありですので、しっかりとした人生経験を積み重ねてきたわけでもなく甘く生きてしまった私のたわごとではありますが、まっそんな考え方もあるかもしれないというふうには、やさしく聞き入れるように読んでいただけましたら幸いです。

平成二十五年七月

塩田博文

